

三上先生を偲んで

杉山益之

コロナ禍の渦中の2020年10月に三上先生が亡くなられたという連絡を受けました。三上先生から頂いたお手紙などからご闘病中であることは存じておりましたがそれほど状態が悪いとは思っておらず、ご年齢的にまだまだお若いということもあり、にわかには信じられませんでした。

私は東北大学化学科の学部三年生の後期から博士課程終了までの計7年間、三上研究室に在籍しました。博士課程終了は2006年で、三上研究室卒業の博士としては一番若い年代です。学部での講義もいれると9年間、三上先生のお世話になりました。

学部3年生の研究室配属で初めて三上先生の部屋を訪ねたときに、「これからは同じ釜の飯を食べた仲間、家族のようなものだからなんでも相談するように」といわれたのが、印象にのこっています。私が配属された当時の三上研究室は、助教授の江幡先生をはじめ助手（今でいう助教）3名と学部から博士までの学生の大所帯でしたが、実際に配属されてみると先の三上先生のお言葉通りの三上先生を中心としたアットホームな雰囲気の研究室でした。

当時の研究室は、三上先生以外のスタッフの先生方の下に学生が配属され、三上先生が父親的な立ち位置で全体をみているという形をとっていました。主な研究内容は三上先生がシカゴ大で開発された超音速ジェット分光の研究です。学生ごとに個別の研究テーマを持ち、右も左もわからない配属直後はともかく、ある程度研究内容を理解してからは自由に研究させてもらえる環境でした。今思えば、応用研究が重視される世相の中にあって基礎研究寄りの研究テーマで学生が不自由なく研究できるだけの環境を維持するのに三上先生はじめとしたスタッフの先生方の不断の努力があったと思います。

研究室での生活を思い返してみると、当時は研究室に深夜までいる学生も多く、私も年次が上がってからは1日の活動時間の大半を研究室で過ごしていました。実験データを取得するマシンタイムの間は寝る間を惜しんでデータを取得し、マシンタイム以外の時間は居室で実験データの解析や文献検索を行うというのが基本的な学生の生活パターンでした。

三上先生の教授室のとなりにあったセミナー室は研究室生活の中心で、輪講や勉強会で使われるほか、実験データの解釈や論文・専門書の内容についてのディスカッションもセミナー室で行われるのが通例でした。このセミナー室と教授室はつながっていたため、セミナー室でディスカッションをしていると三上先生が教授室からひょっこり顔を出されて、議論に参加されることも多々ありました。研究の議論をされている時の三上先生は本当に楽しそうで、研究が好きだということがひしひしと伝わってきました。私は研究室卒業後、企業の研究所に就職しましたが、これまで研究開発を楽しんで来ることができたのは三上先生の薫陶によるところが大きいです。

研究室では、卒論などの打ち上げや花見、芋煮、バーベキューや忘年会などの印象深いイベントも多くありました。三上先生は料理がお上手で、イベントでは手ずからお料理をふるまわれることも度々ありました。なにかの打ち上げの折に三上先生が市場で大きな鮭まるまる一匹を買ってきて、ハラコ飯をふるまってくださったことがあり、私もお米の研ぎ方を指

南いただきながら調理のお手伝いをしていたことがあります。その時の雑談で三上先生が、「料理も有機合成と同じできちんと手順を追っていけば大きな失敗はしない」とおっしゃっていたことが記憶に残っています。最近でも、料理をするときにはこの三上先生の言葉が思い出されます。

三上先生は科学教育に対する大変深い思い入れをお持ちで、大学での教育にとどまらず、定年退職されたあとも地域の子供達に科学の楽しさを教えるふくろう塾を開かれて積極的に活動されていました。私も科学技術の一端に関わるものとして、三上研究室で学んだ研究や科学に対する姿勢を大切にしていきたいと思います。

三上先生、本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。